
SSSS

風待月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SSSS

【Zコード】

Z0589BA

【作者名】

風待月

【あらすじ】

現代に『魔法』があつたら、どうなると思う? なんでもできる『魔法使い』にも、どうにもならない事はある。

たつた30年前に『魔法』が現れた世界、常人以上超人未満の『魔法使い』たちの、普通以上特殊未満の学生生活。

【* 検証用実験文章です。お見苦しい点があることを理解して頂いた上でお楽しみ頂ければ嬉しいです。感想・指摘などの形で検証に

協力頂けたら幸いです】

「歯あ食いしばって腹に力入れろよ！」

「え！？ ちょっと堤さん ！？」

堤十路つつみとおじ

の人生における願いは、普通に生きること。
心身健全・学業大成・金運招福・大願成就。いずれも高望みなん
てしていない。

風邪で寝込んでも入院しなければOK。100点は無理でも赤点
取らなければ問題なし。裕福でなくても借金なく生活できればいい。
ついでに明かすと、恋愛成就なんて願望も全く持っていない。
何事もほどほどで十分。出る杭は打たれる。過ぎたるは及ばざる
がごとし。

当然、揉め事なんてまっぴら。

基本は待ち、受身の姿勢。トラブル解決不可能なら逃げることも
躊躇しない。男らしくないという文句は聞き流す。
だから家族からは『なあなあ主義』と言われてる。
そんな彼が……いや、普通なら誰でもそうだが。

「轢いたーーー！」

街中でオートバイに乗ったまま、人間に突っ込むことになるとは
想像もしていなかつた。

推定体重70kgの物体に、車体+2人の人間=350kg超の
重量が、それなりの速度でまともに激突。はねられた男は、カエル
が潰れたような声を上げて吹っ飛んだ。
しかしブレーキをかけながらの衝突なので、死ぬほどではないだ
ろう。

「よし」

「人身事故を起こして平然としてる堤さんが怖いです……」

「前の学校で何回もやつたから慣れた」

「どんな学校ですか！？」

「そんなことより

残るもう一人が、人身事故を正当防衛と証明してるので、なにも問題ない。

仲間がオートバイにはねられるという突然の事態に、呆気に取られた男の手には、黒光りする金属の塊。

我に返つた瞬間、それを向けられるのは、想像にかたくない。

「あつち、木次の担当でいいのか？」

「え！？ あ、はい！」

リアシートに乗つた学生服の少女が、構えた長大な杖を男に向けた途端、空間に淡く光る幾何学模様が描かれる。

それはあたかも魔法陣。

「実行！」

その一言で小規模ながら、超常の落雷が発生し、残る男に直撃。手にしていた金属塊を取り落とし、薄い煙を上げて崩れ落ち、見ていると不安になる痙攣をする。

「……そのエゲつなさで、俺が人をはねたの、文句言われたくない」

「ちゃんと手加減しましたよ！？」

「銃が暴発したらどうする気だったんだ？」

「えーと……結果オーライということでの……」

「それで、どうすればいい?」

「追つてください!」

「了解」

はね飛ばしてうめいてる男と、感電してうめいている男は、誰かがなんとかしてくれるだろうと判断し、十路はオートバイを発進。

「やつちました……」

堤十路の人生における願いは、普通に生きること。

揉め事なんてまっぴら。

家族からは『なあなあ主義』と言われてる。
だから。

『魔法使い』の少女を後ろに乗せて、誘拐犯をオートバイで追いかけるなんて、田標から真逆の時間は望んでいなかった。

検証事項：ぱつと見読めない固有名詞

この小説に登場する諸々は、実在の人物や企業・団体とは関係ありません。実在の地名は出でてますが、微妙に違つたりします。

「お待たせ致しました」

ドリンクバーの「アヒーと、オレンジジュースしか乗ってなかつたテーブルに、ウェイトレスの手で、チョコバナナパフェと伝票が置かれた。

「サーンクス」

「「」」

朝食には少々遅く、昼食には早い時間の、静岡県御殿場市。

7月を過ぎれば登山客が増えるのだろうが、まだ6月のために人もそう多くない、富士山麓の一角に構えるファミレスで、1組の男女が向かい合うテーブルから、ウェイトレスが離れた。

早速パフェの器にスプーンを突っ込むのは、中学生と思える小柄な少女。

それを頬杖をついて眺めているのは、少年と呼ぶには少し過ぎた高校生。

少女の雰囲気は天真爛漫。

大胆に足を出していくても色気は感じず、健康そうな印象が先に立つ。幼さが残る明るい顔立ちには、どこかイタズラ小僧のような愛嬌がある。

げつ歯類の動物を連想。そう聞けばリスやハムスターが思い浮かぶだろうが、トゲだらけのヤマアラシも当てはまる。

青年の雰囲気は怠惰。

『鋭い目つき』と言えば聞こえはいいが、気が抜けていれば人相

が悪いだけ。量販店のポロシャツとジーンズに包まれた体は細身の筋肉質だが、背筋を丸めて頬杖をついていれば、そんな体付きは隠されて、ただだらしない。

例えるなら野良犬。ただし今はエサをもろりと満足そうに毎晩しています。

少女の名前は堤南十星。つつみなとせ

青年の名前は堤十路。つつみとおじ

顔立ちも雰囲気もあまり似ていないが、2人の関係は同じ姓が示している。

「などせ。ほら、ついてるぞ」

パフェグラスに半分顔を突つこんでいたために、鼻の頭についたクリームを、テーブル越しに手を伸ばしてナプキンで拭いてやる。

「さんきゅー」

「久しぶりに会うけど、お前、なんも変わってないな……」

「相変わらず食べ方が子供っぽい?」

「……まあ、そんなどこ」

Tシャツの上に羽織ったミリタリーベスト、今はテーブルの隅に乗せているキャスケット帽、履いているのはデニムのホットパンツにバスケットショーズ。

少年にも見えてしまつ南十星の服のことを考えていたが、それは口に出さない。

「悪いな、などせ……平日なのに呼び出すことになつて」

「気にしない気にしない。たつた2人の兄妹じやん。それに今さら学校休んだところで、あたしゃ補習受けの成績だし

「お前なあ……」

「兄貴、そんなことよつ

連絡自体はそれなりにしていたものの、直接顔を会わせるのは数力用^ぶぶり。

はるばる飛行機に乗つて会いに来た南十星^{なとうせい}は、スプーンを置いて、再会と転機を祝つた。

「退学おめでと を、つ！？」

多大な怒りと、ほんの少しのやるせなさと、わずかばかりの『口イツやつぱりアホだ』という再認識が込められた、十路の渾身のデゴピン炸裂。

額を押された南十星^{なとうせい}、一人掛けのソファを床^{じゆ}でのたうち回る。

「なにがめでたいかこの愚妹^{ぐめい}があ！？」

「『シヤバの空氣ウメー』って感じじつしょ！？」

「規律の凄まじい学校だつたよー、刑務所出たような気分ではあるよー！」

「だつたらめでたいじょん！」

「寮を追い出されたら生活に困るんだけどなー？」

「じつち来りやーじょん。おじさんたちも『もうしふ』って言つてくれてたよ？」

「いや、気持ちは嬉しいけど……」

早急に解決しなければならない現実的な話になり、そして店内の非難の目にも気づき、声のトーンが下がる。

2人の両親は、すでに他界していて、子供の頃に生活していた家もない。

だから南十星^{なとうせい}は、十路^{とおじ}が全寮制学校に進学したのを機に、伯父の

とこりで生活する』ことになり、そして十路は学生寮が唯一の寝床だつたのだが

「じゃあ、どうすんの？ いつもの『なるみつになるや』的なな
あ主義を發揮しても、どうもできな『いっしょ』？」

その質問に答えず十路は、A4サイズの封筒を差し出した。

「なにそれ？」

「学校案内、だらうな……」

封筒の下部に印刷されているのは、『学校法人 修交館学院』と
いう文字と、兵庫県神戸市の住所。

既に封は切つてあるので、遠慮なしに南十字星は中身を確認する。

「わあ、すつじこ学校じやん」

厚手のパンフレットにカラー印刷されているのは、広い敷地に建
つ、まだ新しい校舎群と、充実した学校設備の数々。

私立校に多い付属型。いわゆるエスカレーター式なのか、法人全
体だと幼稚園から大学まで同じ名前の学校があるらしい。

「このパンフ、兄貴が頼んだの？」

「いや。1週間くらい前に、なぜか寮の机の上にあつた

「なんで？」

「俺が訊きたいよ……」

それはつまり、通常の郵便物とは違つて、学校の事務局も寮監の
手も通すこともなく、正体を知られないよう誰かが直接、十路にこ
れを渡そうとしたということ。

中身がパンフレットだけなら、十路の今後を心配する誰かの親切と考えることもできるが、同封されていたのは、それだけではなかつた。

転入時に必要な書類もろもろ。授業料免除の申請用紙。学生寮の入居に提出する書類その他。

極めつけは、既に十路の顔写真が貼られている、修文館学院高等部3年生の学生証。

「どーやら俺は、その学校からスカウトされてるらしい……正直、不気味なんだけど?」

「まさか兄貴の退学と関係してんの?」

「わからない。関係ないと断言できないけど、関係あるとは考えにくいんだが……」

十路をスカウトとするために、退学させる暗躍があつたとは考えられないが、見知らぬ学校の誰がどこの十路の退学話を聞いたかという疑問が残る。

「でも、こんな物まで渡されたからな……」

そう言いながら十路が見るのは、ソファの隣に置いたケース。縦30cm、横40cm、厚さ10cmほどの、アタッシュケー スのように合巻に覆われてこる小型のもの。

「ヤーーいやさつきからソレ、気になつてたんだけど、中身なんなの?」

「秘密だ。お前には見せられない」

「エロ本ぐらいどーつてことないって」

「すぐそつち方面を連想するといひに、お前のダメつぱりが表れてる」

「男が女に見せられないモンって、それくらいしかないじゃん?」

「アホか」

「あ、妹モノとか制服モノならまだしも、母親モノとかホモだったら引くな……」

「…………話に戻すな?」

人一人のこととはいって、これだけの用意をするとなると、金銭的に決して安い額を使うことになるはずだが。

「どこの誰かが心配してくれるのは嬉しいけど、ソレよりもする価値が、俺にあるか?」

「あるじゃん? 特殊な才能と経験の持ち主」

「それこそありえない」

十路は「一ヒーヒーハップを持ち上げて、する間の一呼吸分で、自嘲にならない準備をしてから口を開く。

「お前もわかつてるだろ? それが俺が育成校に通うことになって、今回退学になつた理由だ」

「じゃあ?」

「わからない。だから、これからその学校に行つてみて、直接話を聞いてみる」

「いきなり行つて大丈夫なの?」

「もう電話してアポは取つてあるよ」

南十星がストローでオレンジジュースに浮かんだ氷をつつく。随分つまらなそうな顔で。

「…………そこに転入するかどうかは、その話次第つてこと?」

「そういうこと。条件次第ではこの不気味な誘いに乗つてもいいし、

無理だと判断したら……伯父さんに迷惑かけるかもしない
「メーワクかけるつて言つても……こつちに来るつて意味じゃない
よね?」

南十星は歳相応のすねた顔で、十路の顔を見つめる。

「ああ……そつなるな」

対して十路は歳には似つかわしくない、諦めのよつた老齢とで溜
息をつく。

そんな様子に南十星は氣まずげにストローを動かして、迷つた末
に口を開いた。

「……やつきは茶化したけど、あたしは兄貴が退学になつて、よか
つたと思つ」

「まあ、な……」

「兄貴はどうなの?」

「生活には困るけど、もつあんな事に関わらなくて済むから、ホッ
としてるのが正直なところ」

「だけど、もう一緒に暮らせないんだ……?」

「俺はお前の近くにいるべきじゃない。俺たちは親がいないから、
家庭の事情がややこしいし、なにより普通に生きれる境遇じゃない」

「…………」

無言になつた南十星の、ストローを動かす手が止まつた。

「……あこつり、ふざけへる」

人懐こい瞳が細くなり、獣じみた光が宿る。普段はリストの愛らし
さに隠れた、ヤマアラシの攻撃心。

「なとせ」

何気ない呼びかけに冷たさがこもる。怠惰な野良犬が伏せたまま、軽く牙を覗かせた。

「だつて……みんなして兄貴のこと、バカにしてるじやん……」

それだけヤマアラシは大人しくなり、シュンとして逆立てた針毛を寝かせた。

「仕方ない」

そして野良犬は苦笑して、ヤマアラシを慰めて、リスの毛皮をかぶせようとす。

「ただでさえ、俺は世界で一番夢がなくて、一番面倒の多い人種なんだぞ？」

言葉を切つて、コーヒーを空にして。

「俺は『魔法使い』なんだ。しかも出来損ないの」

世界には、『マナ』を操り『魔法使い』と呼ばれる者が扱う『魔法』が存在する。

しかし秘術ではない。誤解と偏見があつたとしても、その存在は使えない常人にも広く知られたもの。

そして古よりのものではない。たった30年前に発見され、未だそのあり方を模索している新技術。

なによりもただのオカルトではない。その仕組みの詳細は明確になつていらないものの、証明が可能な理論と法則。

知識と経験から作られる再現可能な奇跡。それが現代における『魔法』。

その力は、多岐に渡る分野で応用が期待されている。『空気を操る魔法』と『空を飛ぶ魔法』による金属化学の新素材開発、『炎を操る魔法』の応用で新エネルギーの研究、『治癒の魔法』で最先端医療でも不可能だつた治療法の確立などなど。

つまり現代社会における『魔法使い』は、優れた科学者であり、技術者であり、研究者でもあると、世間的には定義されている。

しかし存在そのものは知られたものであるが、『魔法使い』は日常的な存在ではない。

その価値が發揮されるのは、人々の生活に直接関わる部分ではないため、まず知られないからだ。

加えて『魔法』を扱える人間は非常に少ないという理由もある。人ならざる知識を処理するための特殊な脳機能を持つ人間は、遺伝学的に数千万分の一の確率でしか誕生しない。

そのため現代では、世界的にも貴重な人的財産として扱うことを、法律で定めている国がほとんど。幼少期の検査で適正があると判断された子供は、レベルごとにそついた全寮制の学校に集められて生活し、一般教養と並行して専門技術の教育を受けることになる。

十路じおじが通っていたのも、そついた特殊教育機関、通称『育成校』。

完全寮制、生活費も学費も全て国費で賄われ、次世代の発展に必

要不可欠な人的財産を、未来を作り出す人材へと育てると謳つた国

家機関。

堤十路^{つつみとおじ}は、そんな学校を強制退学させられた。

彼が『出来損ない』になつたから。

00-010 AM10:47

静岡県御殿場市某ファミレスにて（後書き）

1 / 5 前書き修正

インターミッション（任意の合間）を初っ端の「」の間に挟むのもどうか……と思いつつも挿入。

今回は本筋のストーリーには直接は関係ない、オマケ的文章という形で使っています。

「つばめ先生、入りますよ……」

「お、来たね、ジユリちゃん」

「わざわざお茶を淹れさせたの」、授業中に呼び出すの、やめてくれさせ……」

「いや、そういうじやなくて」

「前に『お鍋食べたくなった』なんて言われても用意できません……」

「いや、それでもなくて」

「じゃあ今日の晩ご飯、なにが食べたいんですか……？」

「どうしてわたしが口を開くと、そういう用事だと思つの？」

「いつもそんな用事で呼び出されるからですよ……」

「授業中呼ばんでない！ わたしもやけにまだ非常識じやないいつもりだよ！？」

「じゃあ今日は……？」

「ちゃんとした部活」

「今朝の事件でなにか連絡が来たんですか？」

「ううん、別口。転入生が来るから、駅まで迎えに行つてほしいの。簡単な資料は携帯電話に送つておくよ」

「それこそ私じやなくともいいじゃないですかあ……」

「わたし、忙しいんだよね~」

「いま思つつきり遊んでるじゃないですかあ……」

「まーそれは冗談として、わたしようと、キミたちがやるべき」とだと思つから

「はい~」

「『普通の転入生』じゃないの」

「……そういうことですか」

「諸々のことを考えた結果もあるし、しかも今日は」

「部長、学校にいなーんでしたね……」

「うん。ついでに3年生の男の口だし、やっぱ3回年代の女の口の

方がいいと思うからね」

「え？ 先輩なんですか？」

「そうだよー。6月のこんな中途ハンパな時期に来る謎の転校生。パンくわえて走ってたら曲り角でぶつかって恋に発展しそうとか思わない？」

「や、全然……というか何年前の少女マンガですか」

「最近の若いモンは形式美を理解せんのぉ」

「ともかくわかりました……お迎えには行きます」

「あ。さつき届いたつて連絡があつたから、迎えに行く時には、部室の新しい備品を使って」

「はい？ 備品？」

「そんでさあ、約束の時間からもう5分過ぎてるから、急いでね」

「それ先に言つてくださいよおー？」

00-020 PM15:37 木次樹里（前書き）

伏線いっぱい。しかも今回の実験文章ではなかなか回収しないのを

普通列車と新幹線を乗り継いで4時間余、南十星との話し合いを終えて、堤十路がやつてきたのは新神戸駅のロータリー。

退寮直後に近場のファミレスで家族の話し合い、そしてすぐさま長距離移動としてきた割には軽装で、合金製のケースをぶら下げただけの、ほぼ身一つ。

「遅い……」

高校生の腕には少々高価なミリタリーウオッチを見て、周囲を見渡す。

この動作は何度も繰り返した。

先日、修文館学院の事務局に連絡した際には、駄に迎えを寄越す
という話だつたが、それらしい人物と接触できずに、すでに予定時
刻から20分。

「住所わかってるし、勝手に行くか……？」

迎えと行き違ひにならうと気にしてつづく、バス停へ向かおつと
した時。

「止まつて止まつて……！？」

オートバイが駅前のロータリーに入ってきたのが、嫌でも目に付いた。

スクーターではなく、本格的なオフロードタイプのオートバイに乗っているのは、学生服のままという根性の入った（というか運転

には危険な）格好の女子学生。

そのオートバイはブレーキもかけずに、猛スピードで十路の方へと突進して

「どいてくださいああああい！」

「つて！？　おいー　こっち来るのかよ！？」

衝突する、と思つた直後、盛大なスキール音と共にフルブレーキ。

「あやあー！？」

その勢いで乗つてた女の子は、オートバイから放り出されて縦に半回転。

逃げるには間に合わない。十路は飛んでくる女の子を受け止めようとして。

「の、　つー？」

視界いっぱいのパステルカラーと一緒に、尾骨の直撃を顔面に食らつて吹っ飛んだ。

相手が女の子とはいえ、全体重をかけたヒップアタックの威力は並ではなかつた。

「やつと鼻血が止まつた……」

鼻につめたティッシュを交換しても、真っ赤に染まつていたが、ようやくそれもなくなつた。

「『めんなさい』『めんなさい』 本当に『めんなさい』。」

その間、加害者となつた女子学生は、頭を何度も下げ続けていた。

「念のため弁解しておけど、興奮して鼻血出してたわけじゃないからな？」

「や、わかつてます……」

そう言いながらも警戒するように、手は学生服のスカートに伸びて、裾を押さえていた。

「わかつてますけど……やつぱり、見えました……？」

「ヒップアタックを男の顔面に叩き込むのと、スカートの中を知られるの、果たしてどちらが恥ずかしいものなのだろうか」

「……中身を知られる方でしょつか」

「いや、一瞬の事でなにがなんだかわからなかつたし、その直後の衝撃の方がものすこかつたぞ……」

「そうですか……そうですよね……」

「ただ親切心で言わせてもらひと、今はこじてるオレンジのチェック柄のパンツ、後ろに穴が開いてたから、換えた方がいいと思つ「バツチリ見てるじゃないですかあ！？」

会つたばかりの女子に泣きそうな顔をされて、十路は『やはり言ひのではなかつた』と少し後悔。

「……不可抗力だけど、見たのは確かだから俺が悪かつた。だけどそつちも単車を暴走させなければ、こんな事にはならなかつた。お互いそれぞれ悪い部分がある。だからこれで相殺。以後忘れる。謝るのもなし。OK？」

「お、おーけいです……」

一気に言われ、頭で考えるよりも前に、反射的にカクカクつなぎでしまう女子学生。

オートバイを『オート』と呼ぶ、聞き慣れない言い方にも、不自然に思う暇がなかった。

「それじゃあ、気をつけろよ」

体を張って受け止めた甲斐あって、女子学生にケガはなかったようだから、安心して予定通りにバス停に向かおうとして。

「堤さん？ どちらに行かれるんですか？」

その女子学生に呼び止められた。

「俺、名乗ったつけ？」

「……あ。自己紹介、してませんでしたね……」

鼻血を出していた間に確認していたのか、女子学生の手には携帯電話。

その液晶に十路の顔写真が写っている。

「えー……遅れた上に、ケガをさせてしません」

とても言ことづりひとつ、そして恥ずかしそうに、彼女は頭を下げる。

「修文館学院の理事長から、お迎えを言い付かつた者です……」

「学生、だよな？」

「はい……高等部1年、木次樹里です」

『迎えを寄越す』としか聞かされていなかつた上、平日ならば、学校の職員が来るものと勝手に思つていたが、しかしやつて来たのはオートバイを爆走させる2つ年下の女子高生。

改めてその姿を改める。

6月で1年生。衣替えをしたばかりで、まだ糊^{のり}の効いた夏服に包まれているのは、特別背が高いわけでも低くもない、細身の体。ミディアムボブの髪に収まつた、人の良さそうな顔立ちは、なぜか犬を連想。それも愛玩用の小型室内犬ではなく、警察犬や災害救助犬のような、野性と知性を併せ持つ大型種。

オートバイという要素がなければ、どこかにいそうな普通の女子。騒がれるほどではないが、男子生徒の間で『ちょっと気になる女子』の地位を確立していそうな印象。

「えへへへ……早速ですけど、堤さん」

先ほど以上に言いにくそう^{きくそう}、木次樹里^{きすきじゅり}と名乗つた少女が、申し訳なさそうに口を開く。

「バイクの免許、持つてます……？」

「なあ……木次^{きすき}さん？ 質問に質問を返して申し訳ないけどな？」

初対面で呼び捨てではまずからうと、一応『さん』付けはして丁寧な口調にしたもの、十路は半眼で、すでに目が泳いでいる樹里の顔を覗き込む。

「まさか免許を持つてない？」

「……動かし方は知つてるんですけどね……」

「うおい！？ 最悪だな！？ 無免許運転かよ！？」

「私だつて意味わかんないですよぉ！ でもあれに乗つて行けつてつばめ先生があ！」

「……おけ。わかつた。了解。意味は全然わからないけど、問い合わせても仕方ないってのはわかつた」

つまり、その『つばめ先生』とやらは、十路が免許を持つていてのを織り込み済みで、樹里をオートバイに乗せて行かせたということ。

それでも無免許運転を実行するのはどうかと思つが、もはや遅い。

「俺の分のメットは？」

「大丈夫です。用意します」

「だつたら問題ない」

そう言つて、路肩に駐車されているオートバイの方を振り返つて。

「…………？」

十路の眉根が軽く寄る。

デュアルパー・バスと呼ばれる、未整地も市街地も走れる汎用・中型のオートバイ。

しかしメーカー・カタログでは見たことのない形状。

この手のタイプはエンジンが露出してるものだが、これは機関部までボディに覆われている上、通常車体右側についているマフラーが、目立たないよう後部と半一体化している。

鼻血もようやく止まり、手に付いた血は渇いてるが、それでも気をつけて赤と黒でペイントされたボディにも触れる。

新車らしい、ひとつも傷もないそれが、普通の素材とは違うことを確認。

触れたそこには”Bargeest”とロゴタイプ。どうやらそれ

が、この車体につけられた名前らしい。

「……堤さん？」

不審げな樹里には構わず、十路はフロントに埋め込まれたメータ一部分をノックしてみる。

しかし当然、なにも起こらない。

仕方がないといった顔をした十路は、車体後部横に追加されたいたアタッチメント、その左側に、ずっと持っていたケースを載せると。

ガチリと音を立てて固定された。

「え……？ そのケース……？」

「なるほど……まさかこんなところで、コイツにお皿にかかるとは思わなかつた」

それはビジネスマンが持ち歩くアタッチシェースではなく、積載量が少ないオートバイに追加する、パニアケースと呼ばれる収納用追加パーツ。

「バーゲストって、なにから付けた名前なんだ？」

「確かにイギリスの昔話に出てくる、犬の姿をした魔物だつたと……」

「行儀の悪そうな犬だな……？」

これに乗るだけなら、免許は必要ないのかもしれないが、十路も

そこまで道路交通法に詳しくなかつた。

- ・検証：場所の実在性
とは言つても完全に同じではなく、中途ハンパにフィクションというのも自分でどうかと思つもの。

神戸は山と海に挟まれ、古くは街道の要所として、そして港町として存在していた。

それが江戸時代の終わりと共に、国際港として開かれて以来、急速に都市として栄えた。

古くから存在する日本文化と、外から入ってきた西洋文化が同居し、しかも昭和に時代が移ると、阪神工業地帯の中核として、重工業と化学工業が発展。

海を埋め立て人工島を作り、海上空港を作り、技術的な試みが行われた過去もある。

そしてそれに携わる人々のベッドタウンとしての一面も存在する。新旧取り混ぜて、さまざまな要素が混じった場所。それが神戸。

そんな土地に30年前、また新たな要素が入った。

それが『魔法』。

全世界21ヶ所のひとつ、淡路島に突如巨大な『塔』が出現したと同時に、『魔法』という未知のモノが現れた。

住人は便宜が図られ移住させられ、あらゆる交通手段が排除され、現在の淡路島は国際機関に管理されて、人の出入りは容易にできない。

世界的にも珍しい、『魔法』の発生源に一番近い主要都市である神戸が、『魔法』の研究都市として発展し、さまざまな分野の企業や研究機関がそれを解明・利用するために、この地に集まっている。

「……こういう観光案内の説明はいりませんか？」

高台にある新神戸駅から坂道を下るオートバイ。そのリアシート

に座る樹里が、運転する十路に問いかける。

十路のものはフルフェイス、樹里のものはジヒットタイプ（+スポートゴーグル）、2人のヘルメットには小型の無線機が仕込まれているため、走行中のエンジン音の中でも会話できる。

人懐こそうな印象を裏切らず、樹里は初対面の十路にもあれこれ話しかける。

「その辺はなんとなしには知ってる」

「『塔』に関しては、どこの小学校でも習うことですね」

「それより木次さん……制服のままで2人乗りするの、どうかと思

う

「や、着替えないです……」

樹里の着ている制服は、膝上100cmほどのミニスカート。60km/hの走行で、裾がパタパタ音を立ててはためいているので、十路としてはやはり心配になる。

しかし、免許はなくて運転もできなくてもオートバイ自体には慣れているのか、樹里はスカートを片手で押さえながらでも、危なげなくリアシートに収まっている。

「せめてブルマー履いてくれ」

「ウチの指定体操服はハーフパンツです」

「じゃあ、それでいいから履くべきだと思う」

「や……スカートの下から出でると、カツ」「悪そうで……」

「ファッショントパンツ全開になるの、どっちがマシ?」

「それならファッショントパンツ優先です。スカートを押さえていれば問題ないわけですし」

「最近の女子高生は嘆かわしい……」

「堤さんって、結構お固い人なんですね……」

「まあ、昨日までお固い学校にいたからな」

「どちらの学校ですか？」

「……機会があつたら話す」

街の案内も含んでいるのか、樹里の指示で神戸市の中心道路、国道線2号線を走る。

あつと言つ間に通り過ぎる光景に、異質なものが目に付く。銀行の前には、見ればすぐわかるパトカーだけでなく、警察車両が数台停まり、封鎖線を作つていた。

「銀行強盗でもあつたような雰囲気だな……？」

「全国ニュースになつてたと思うんですけど」

「今日はずっとドタバタしてゐし、ニュースも新聞も見てないんだ」

ニュースの内容か、簡単に樹里が説明する。

事件が起つたのは今朝5時前、シャッター や監視カメラと共に、店舗内のATM15台が破壊され、現金約1億7000万円が盗まれる。

ATMは不正にこじ開けられると、現金に薬液を噴射して汚染させる機能があるが、これが起動しておらず、また犯行時間は監視カメラが壊されてから、警備員が到着する15分以内に犯人は逃走している。

警察によると、現場近くから黒い車が逃走するのが目撃されていて、その行方を追つてゐる。

「……その事件、ちょっと異常だろ？」

「はい、だから全国ニュースになつたんです」

「『魔法』の研究都市つての関係あるのか？」

「や、今のところはなんとも……あ、そこ左折です」

不審には思つても、事件に直接関わることのない立場の2人。世

間の一般人の多くが抱く感想以上のものは持てず、十路は指示通りに運転する。

やがて坂道を登つて行くと、山の中腹、六甲山のふもとともに言える土地に、団地のように詰め込まれた建物群が見えた。

学校法人修交館学院。

国内外問わず、世界で活躍できる優秀な人材の育成を^{うたい}謳い、幼稚園から大学までそろえた、今時では珍しい複合校。

その高等部の駐車場に、2人乗りのオートバイが駐車された。

「まだ新しい学校なんだな……」

「はい、築5年ほどですよ」

土地が土地だからか、どこかしら研究施設を連想する近代的な校舎を、樹里の案内で進んでいく。

教室はガラス張りで、廊下から簡単に授業の様子を見学することができる。

板書されてる内容から察するに、物理、現代国語、数学など、ごく普通の高等学校の内容で授業が行われている。

その中で目につくのは

「留学生が多いな?」

自然なブラウンやレッドショウの髪を持つ生徒が、大抵どの教室にもいる。中には宗教上の理由か、民族衣装を身につけて席についている生徒も。

「海外からこの街に異動で、ご家族でいらっしゃる人も珍しくないですから、留学生さんが多いんです」

選択授業なのか、特別クラスなのか、留学生ばかりを集めて、日本語の授業をしている教室の前も通った。

「だから授業のスタイルも、他の学校とはちょっと違うと思います」「英語圏の留学生に、英語の授業しても仕方ないだろうしな」

特別教室も案内され、実験室や音楽室、情報処理室や調理実習室など、どこの学校もある、しかし新しい設備が入った教室も見学した。

校舎から見下ろすグラウンドでは、神戸の市街地と海をバックに、体育の授業でサッカーが行われている。

「堤さん、ウチの学校、どうですか？」

「まあ、普通の学校？」

「あはは……どんな学校を想像されてたんですか……」

「『魔法』の研究都市にある学校なんだから、変な授業とか、設備があるのかと」

「や、ここにいるのは普通の人ですし、『魔法使い』は専門の学校に通うのが普通なんですから」

苦笑と共に答えた樹里が、なにか気づいたようにハツとし、言葉を切った。

「ごめんなさい……堤さんは、事情があつたんでしたね」

「聞いてるのか？」

「詳しくは知りませんけど、『魔法使い』だとは聞いてます

昇降口を抜け、外に出る。

そしてそのまま別の建物に向かう樹里に、十路は大人しくついて

いく。

「珍しくないわけ?」

「なにがですか?」

「いや、俺は《魔法使い》だし」

数千万分の一の確率でしか発生しない人間。

《魔法使い》が集められる育成校にいた時は別として、素性が知られるたと過敏な反応が返ってくるのが十路の常だつたが。

「いいえ?」

しかし樹里は、あっさり否定。

「こんな街ですから、何人か《魔法使い》がいますから、そこまで珍しいってわけでもないですから」

「学生に?」

「はい。それに」

そして樹里は笑顔を浮かべた。

「私も《魔法使い》ですか?」

「え?」

それには十路も驚きの声を上げる。

彼女からは、そういう『匂い』が全くしない。

「ここでは《魔法使い》も、普通の生活をしてるんですよ」

「……普通の生活つて?」

「や、『』くフツーの生活ですけど? 普通に学校来て、普通に勉強

して、普通に「」飯食べて、普通に友達と遊んで、普通に生活してますけど？」

それは十路の常識にはない環境。
『魔法使い』の生活は、国家的な保護と引き換えに、様々な制限がある。

おおよその進路は決まっており、公務員という選択肢以外を選ぶ自由はあまりない。海外旅行はビザが取れない場合もある。
十路個人の場合だと、完全寮制の育成校に通っていたため、もつと厳しく、外泊は基本的に不許可、敷地の外へ出る場合でも事前許可が必要で、帰った後にいつどこで誰と会い何をしたか学校へ報告する義務もあった。

「……どうして、こんな学校に俺が招致されたのか、理由がわからぬいんだよな……」「……？」

怪訝な顔をした樹里がひとつ建物に案内した。
高等部の敷地を出て、大学部の敷地へと続く階段を昇ったその先、学校法人全体を管理している管理棟。

その一室、『理事長室』とプレートがかかった扉の前で止まった。

「多分、堤さんを招致したご本人に訊いてみるのが、一番だと思いますけど」

「そうだな」

そして分厚い扉をノックした。

伏線というか、"しまかし"というか。
これがちゃんと理解してもいい文にならぬのか不安ですが。

「いやー！ よく来てくれたねー！」

重厚なオーク材を使った机の席に座る、IJの理事長室の主は、30歳に届くがどうかのスーツを着た女性だった。

「改めてはじめまして。修交館学院理事長、長久手つばめです」
「はあ……はじめまして、堤十路です」

「うん、知ってる」
「そりゃそりやうでしょうね」

言葉だけ聞けば、とつあえずちやんとした会話をしているのだが、
実際は違つ。

「つばめ先生……こい加減、ゲームはやめてください」
「あ、――――」

IJの部屋に入つて、なぜかHプロンをつけた樹里が、会話中もこじついていたスマートフォンを、つばめの手から取りあげた。

「がえ、じで――――――お、が――――や――――ん――」
「誰がお母さんですか！ あとまたゲームで課金しまくらないでください！ 電話代6ケタに突入したらケータイ取り上げるつて言ったでしょ！つい――」
「うぐ……！」

「いまお茶淹れますから、ちやんと堤さんと説明してくださ――」
「おやつは？」

「帰りがけにカステラ巻を買つてきました」

「わーい」

「おやつの時間には早いですから、ひとつだけですよ
「えー……」

一介の生徒が学校最高責任者に、説教して、世話をしている。
その姿、さながらお母さん。

「あの、木次^{きすき}さん……？」

「ツツコミはなしでお願いします……」

「……了解」

そういう性格に見えない樹里が田上の相手に怒鳴り、やたらプライベートな会話をし、部屋の隅のティーセットでお茶を入れるのに慣れているのを詮索しようとしたが、先じて封じられた。

どうやら彼女にとつて不本意なのが、顔色を見てうかがえた。

「それで、長久^{ながくて}手理事長……どうして俺をこの学校に招致したんですか？」

応接セツトに移動して口火を切ると、樹里が淹れたお茶が前に置かれた。

「ん~、なにから説明しようかな」

「じゃあ、3つだけ質問しますから、イエスかノーで答えてください」

Hプロンをつけたまま、樹里もつばめの隣の席に座る。普通ならいち学生が一緒に話を聞くものではないが、それをつばめは止めはしない。

「俺が『魔法使い』なのと関係がありますか？」

「イエスだね」

「俺が通っていた学校と、なにか話し合いましたか？」

「それもイエス」

「俺になにかさせようとしていますか？」

「一応だけど、イエスだね」

「そうですか」

それだけ聞けば十分とばかりに、十路が席から立ち上がった。

「え？ 堤さん？」

「それでは俺はこれで失礼します」

驚く樹里は無視し、軽く一礼し、十路はそのまま部屋を出ようとしだが。

「別にいいけど、『これからどうするの？』

つばめの言葉で、扉のノブに手をかけたところで、動きが止まつた。

「『魔法使い』は色々大変だよ？」

「…………」

十路が振りかえると、つばめはしきりを見ないまま、涼しい顔でお茶を飲んでいた。

「トージくんが『魔法』の使えない、出来損ないであつてもね」「え……？」

樹里が驚きの声を上げ、十路の顔を見てくる。

『魔法』の使えない『魔法使い』なんて、聞いたことがないから。

「堤さん。『魔法』が使えないって、本当なんですか?」「まあ……な」

「つばめ先生。まさかとは思いますが、部活のこと、全然お話ししないんですか?」「まあね~」

「やつぱり……なにか変だと想つたら……」

つばめは素知らぬ顔で、お茶請けの菓子をほりほり始める。

「部活って、なんのことですか?」

「ふおれがキリを」のガツ「ー」じょひしたリゴーりよ

手でソファに指し示され、座るよう促されたが、口の中に菓子が入ったままになにを言つたかわからなかつたので、十路は視線で樹里に続きを促す。

「……つばめ先生が顧問で、私も部員なんですけど、この学院には、特殊な部活動があるんです。堤さんがこの学校に招致されたのは、その部活に入部する事が条件だと思います」

「どうこう部活?」

「『魔法使い』として、誰かの願いを叶える……といつ部活です」

「…………は?」

馬鹿げている。

「願いを叶えるって……?」

「だって『魔法使い』は、誰かの願いを叶えるのが本業じゃないで

すか

物語に描かれる『魔法使い』は、確かにそういう役割の者がいる。しかし現代社会に生きる『魔法使い』は、そんな存在ではない。

「大体、そんな簡単に『魔法』が使えるはずないだろ?」

「ここは実験都市ですから、普通の人と『魔法』の関わりの検証実験という名目で、特例として許されてるんです……まあ、かなりの裏技ですけど」

「『杖』は?」

「それも特例で、私たちは自分専用のものを持つてるんです」

存在自体は周知のものとはいえ、一般人が『魔法』と携わることは普通ありえない。

しかしどうやら『冗談ではなく、樹里の言葉は本当であることを理解して、十路は絶句する。

その方法はなくはない。『魔法使い』ではない普通の人間たちが作った決まりの中で、不可能ではないと、十路も理解はできる。だが、普通はそんなことを実行しようと考える人間はない。

「……部の名前は?」

「……都市防衛部といいます」

「……とりあえず3つ、ツツ『ミミ』たい」

「想像できる第1のツツ『ミミ』に返すと、この名前をつけたのは、つばめ先生です……」

中二臭の漂うセンスはこの人か、と菓子をほつばるつばめを横目で見やる。

「第2に、要はなんでも屋です……」

過激なチーム名でも活動内容は町内探検だったりする、小学生レベルのセンスだと認識を改めた。

「第3に、名前だけでなく、内容にもあまり『魔法』要素はありません……」

最近はサンタクロースを信じない、夢のない幼稚園児も増えているらしい、と、センス以前の現実を考えさせられてしまう。そして樹里がツツ「ヨミ」を的確に予想したわけではなく、同じこと誰もが訊くのだろうと思いつつ、複雑な気持ちになる。

「入部した感想は……？」

「あはは……一言で表すと、人生の転換期ですね……」

「悪かった。訊いてはいけないことを訊いてしまったらしいな……」

しかし、田を泳がせる樹里を見る限り、後悔はしているようだが、退部する意思是感じられない。

そうなると考えられるのは、樹里も十路同様に、交換条件の義務として入部しているが、それとも不利益以上の利益があるかのどちらか。

口の中を茶で洗い流し、つばめが会話に加わる。

「…………。転入して、入部してくれない？　ここでの生活の一切を、こっちで面倒見るし、途中で辞めるのも自由だから、悪い条件じゃないと思つけど？」

部の名前や活動内容はともかく、ただの条件と捉えれば、破格の好条件。

しかし、ただの交換条件だと理解している。

「やつちのメリットは……？」

だから、どんな無理を吹つかれらるか、十路は警戒する。

「ぶっちゃけ、人数が足りなくて廃部の危機」
「は？」

「5人以上の部員が必要なんだけど、防衛部は、ジュリちゃんともう一人しか部員がないんだよね」

「この学校の最高責任者はあなたですよね？ それで、理事長が顧問ですかね？ なのに廃部の危機？」

「組織のトップが率先して決まり破っちゃいけないでしょお？」

「……ペリローに恥ずかしい名前変えたら、入部希望者来るんじゃないですか？」

「それはイヤ」
「だったらムリでしょうな……」

嘘をついていると考えるほどではないが、交換条件が余りにも小さなものだから、つばめが口にしていない事情があると疑う。

この招致の話はあまりにも怪しそぎる。

しかし

「入部すれば、トージくんの望みも、叶うかもしれない」

「俺は、出来損ないの『魔法使い』ですよ？」

「それでも、だよ」

「……」

つばめの言葉に、十路の心が揺れ動いた。

それが絶対に叶はずのない願いでも。

つばめの笑みが悪魔のそれに見えても。

00-050 PM16:32

都市防衛部（前書き）

ほぼ設定説明です。

チャイムが鳴り響き、校舎から生徒たちが出てくる。

理事長室で『荷物』を受け取った樹里を追いかけ、私服姿で十路がオートバイを押しながら歩くと、その中では浮いているが、一瞥される以上は注目されない。

放課後の生徒たちは忙しく、学外の人間が敷地内にいても、不審人物扱いされるほどでもないのだろうか。

樹里が長くて奇妙な棒を持ち歩いていても、特別注目されているわけではない。

「ここがウチの部室です」

連れてこられたのは、高等部の校舎の裏手。外からぐるっと回らないと来れない、平屋の建物。

電動シャッターのスイッチを入れ、上がりきるのを待たずに入る樹里が、十路を中へと誘う。

「ガレージのくせに、えらく生活感溢れてるな……」

「やー……つばめ先生いわく、部室棟に空きがなくて、融通できるのはここだけだったそうで……」

元はマイクロバスのガレージだったのか、普通車が縦に2台は置けるスペースに、パソコンが乗ったスチールデスク、ソファセットにティー・テーブルに冷蔵庫。粗大ゴミ置き場から拾ってきたような古びた家具が置かれている。

壁は本棚とラックで埋め尽くされ、背表紙からして難しそうな内容の本はあるが、ほとんどはマンガや小説、ゲームのパッケージや映画のDVDといった娯楽品。あとは中身の知れないダンボール箱。

」のスペースを見る限り、『魔法使い』とは一見無縁。最近の子供はそういうものを作らないかも知れないが、秘密基地を連想する空間。

「でも、新しくオートバイを備品として用意したつてことは、元々ここしか使わせないつもりだったのかもせんね」

持っていた長い棒を、無造作に壁に立てかけた樹里が、隅の冷蔵庫から麦茶をコップ2つに入れる。

「前々から備品として予定されてたんじゃないのか？」

空きスペースにオートバイを駐車させ、十路はガレージ内を歩きまわり、ダンボール箱を軽く叩いて中の感触を調べる。

「そのバイク、お昼までありませんでしたから、堤さんが用に用意したものだと思うんです」

「なんとまあ……転入も入部も未確定なのに、そこまで前もって……」

「つばめ先生、それだけ堤さんが入部することに、期待してるってことじゃないですか？」

「いや、違う。初期投資をあからさまにして、俺が断りこく『よう』にしてる。要するにハメようとしてるだけ」

「あはは……確かに計算高い面はありますけど、信用できる人ですよ」

「悪いけど、俺は初対面だから、木次さんほど信用できない」

結局、転入の話は保留した。

全寮制の学校を退学させられて、今夜の寝る場所もない十路にとっては、魅力的な話ではあるが、信用するには危機を感じる。

だから部員である樹里から、もつ少し話を聞きたぐ、場所を移すことになった。

「その部活、ヤバいんじゃないのか？」

「やー……基本的には、理事長室でお話した通り、なんでも屋さんですよ？」

「《魔法使い》が願いを叶える……それだけ聞くと、正好ファンタジーだな」

手でソファにどうぞと示す樹里に、片手を上げて感謝を伝えるが、なぜか座らずソファのクッションを上げてその下を調べる。

「だけど《魔法》を使えない《魔法使い》は、お呼びじゃないだろ」「や、使えないよりは使えた方がいいんですけど、重要なのは、そこじゃないんですよ」

「違つ?」

這いつづばるように家具の裏側を覗きここんでいた十路が、驚きの目で樹里に振り返る。

「大事なのは、自分が叶えたい望みがあるかどうかで、部員は《魔法》の使えない普通の人でもいいんですよ」

「自分の叶えたい願い……」

堤十路には、それがある。

「木次^{きすき}さんにも、それがあるから入部したのか？」

「そうんですけど……内容は訊かないでくださいね？ 部則で禁止されてますから」

「規則がちゃんとあるんだ？」

「『『魔法』を悪用しない』『自主性に責任を持つ』『部員の事情を詮索しない』『学生らしくあれ』」

「……は？ それだけ？ たつた4つ？」

「はい、それだけです」

「……？」

最初は理解できる。

『魔法』という能力を、犯罪という短絡的な方法に使わないために、最低限の戒めは必要。

問題は残りの3つ。

『魔法使い』なんて得体の知れない人間を詮索しないことはありえないし、『魔法』という異能を持つ人種には義務が生じ、『自主性』という言葉は無縁なことが多い。

そして学生相手に、わざわざ『学生らしく』なんて改めて言うことでもない。

加えて、貴重な人的財産である『魔法使い』は、保護の名目でなにかと制限が多い人種。

重要なことを口頭だけで注意、しかも破つた場合の罰則を定めていないなど、普通はありえない。

「私も、もう1人の部員も、自分の望みを叶えるために、この部活に入部します。ですけどお互い、その内容を詳しくは知りません」

「『事情を詮索しない』って項目が」

「どちらかと言えば『自主性に責任を持つ』の方ですね。人の心に踏み込む責任は、私じゃ取れないかもしませんから」

「なるほど……」

「堤さんの望みだつて、気軽に訊かれてもイヤでしょう？」

「……いや、俺のは簡単」

膝をコンクリートの地面についたので、ジーンズを払いながら、

なんでもない調子で。

「俺の望みは、普通に生きる」と

「……はい？」

「とりあえず、退学せられて、衣食住を欠く状況なので、普通に生活できる程度はなんとかしないと」

「あのー……差し出がましいですけど、つばめ先生の話を『承すれば、それって叶うんじゃ……？』

「ん、まあ、そりなんだけど……」

転入と入部の条件は、話が美味すぎて怪しい。

加えて、やはり躊躇してしまつ理由がある。

十路の望みが『普通に生きる』こと以上、これまで普通に生きていないとこだから。

「ところで……さつきからなにしてるんですか？」

「大したことじやないから、気にしないでくれ

「や、気になるんですけど……」

十路はずつとなにかを落し物を探すよひ、家具の隙間にも手を入れて探つていた。

物を動かすのは遠慮したようだが、床から天井まで、田が届く範囲は全て調べようとしている。

「さすがに見ただけでわかるよひな物はないか……どうだー？　なにか変な電波出でないかー？」

「はい？　電波？」

「ああ、違う。木次さんによいつたんじゃない

「？」

この部室には、人間は2人しかいないのだから、樹里を否定すれば、返事をする者はいない。

しかし反応がないのが否定の反応と、十路は判断。

(盜聴器や隠しカメラの類はないのか……意外だな)

拍子抜けした顔をして、十路は改めて、部屋の隅に視線をやる。

「で、俺も訊きたいんだけど、木次さんの『杖』、あんな風に扱つていいのか?」

理事長室で樹里がつばめから受け取り、部室の壁に立てかけてある物。

長さは2mほどの長大なもので、電子部品のような無骨な先端を持つ、一見子供の自由な発想で作られたガラクタにも見える棒。女の子の持ち物らしく、先端部近くの柄に小さなヌイグルミやストラップがつけられ、それに混じって『防衛部備品 E - W - S』という文字と、管理番号と思われる数字が書かれているプラスティックカードがぶら下がっている。

『杖』と呼ぶには長すぎるが、それでも十路はそれを『杖』と呼んだ。

「や、アビスツールの扱い、いつもあんな感じですよ?」

それは現代社会に生きる『魔法使い』が必須とする『魔法使いの杖』だから。

「念のために訊くけど、『アビスツール』の値段、知ってるのか?」

「や～、実は具体的には知らなくて……」

「標準的なものなら飛行機が買える」

「……セスナ機ですか？」

「ジャンボ機。参考までに、政府専用機の価格は一八〇億円くらい。最新鋭旅客機だともうと高い」

「え、」

「本当に知らないんだな……」

「や、だつて防衛部に入部した時、『これ使え』って、普通に渡されたの……」

「ゲームでは考えられない超高額初期装備……」

「これからは大事に扱います……」

「というか、『魔法使い』なら知つていような?」

「はい……」

怒られた犬のよつに、しょんぼりして長杖を抱える樹里に、十路は改めて疑問を覚える。

(一)の娘、本当に『魔法使い』か……?

自ら『魔法使い』だと名乗った時から、疑問に思つていたが、それらしくない。

十路が知る『魔法使い』たちは、ある意味では純粹であったが、田の前の女子高生のよつな、どこか抜けている純粹さではなかつた。

「厳重管理してんんだろうな?」

「します! いつもまつばめ先生がちゃんと管理してる……はずです……多分……」

「オイ……」

「や、普段どいでじつ管理してるのか、知らなくて……」

理事長室で手渡されたのだから、管理は顧問のつばめがしている

のだろうが、エーカゲンな性格がうかがえる理事長に、樹里も十路も不安になる。

『魔法使い』が『魔法』を使うのは、現代社会では大きな制限がかけられており、普段の管理も猶銃などとは比べ物にならない厳しさを、法律で定められている。

だから、十路は思つてしまつ。

（大丈夫か、この部活……？）

入部した途端、国家権力が絡むような、とんでもない厄介に巻き込まれそうな予感。

00-050 PM16:32

都市防衛部(後書き)

1 / 5 脱字修正

00-055 PM16:33 インターミッション02 (前書き)

今日はちゃんとインター＝ミッション。
シリアル成分挿入？

「探したぞ……」

神戸市郊外、今は事務所も店舗も入っていない、荒れた雑居ビルの一室。

中身が入った麻袋が2つ、部屋が転がつて以外、部屋の中にはなにもない。

「面倒を起こしてくれたな……？」

黒ずくめの男が、氣だるげに日本語で語りかける。
黒いライダースーツに、濃い色の入ったシールドのフルフェイスヘルメット。日中でこの格好はかなり怪しいが、人目は目の前の男以外にないので問題ない。

身長は170cmを少し超えたところ、声の雰囲気からすると若い男、体にフィットしたスーツのラインから、それなりに鍛えているのはわかるが、それ以上の情報は得られない。

「どーゆーつもりだ、アイマン」
「……放つてオイでくだサイ」

『アイマン』と呼ばれた相手の男は、まだ10代半ばと思えるアジア系の顔立ち。服装には変哲なく、浅黒い肌は、175cmほど筋肉質な体と相まって、日本人ボティビルダーと言えば通用しそうだが、なにより言葉のイントネーションが明らかに違う。彼は奇妙な荷物を持っている。

金属の塊。1mを超える棒状のものだとわかるが、火事場から拾ったように破損がひどく、元の形状が想像できない。

そんなガラクタにしか見えないものを、アイマンは大事そうに抱えていた。

「アナタ、私と、もう関係ナイ」

「まあそうだな。俺もお前も使いつぱしりだし、大事なことは知らされていないから、お前がなにをしよう、関係性を疑われることはないだろう」

黒ずくめの男が、グローブに包まれた手で、首筋をポリポリとかく。『困ったな』とでも言つよつて。

「だけど状況は把握しておきたいんでな。後で痛い目みたくないから、俺は平和な時間を割いて、お前を探してたんだ」

「……修理しマス」

アイマンは抱えた金属の塊を示す。

「ああ、お前を解雇する時に、ぶつ壊しちまつたヤツか」

黒い男としては挑発のつもりはなく、ただの事実確認で言つただけだが、その一言でアイマンの目付きが変わり、手にした金属の塊を男に向けた。

人を射殺せそうな視線だが、それを受けても態度は変わらない。

「よせよせ。お前じや俺を殺れねえから」

「 」

その言葉は真実なのだろう、眼光は弱まりはしないが、悔しそうにアイマンは小さく舌打ちする。

「で、なにする気だ？」『それ』を新しく手に入れようにも、お前が盗んだ金額じゃ、とても足らないぞ」

「……口の人に頼みマス」

ズボンのポケットから、アイマンは写真を取り出して見せる。

写っているのは、見事麗しい金髪碧眼の女性。日本人の感覚なら、年齢は20歳を超えている。穏やかな微笑みを浮かべ、しかし凜とした空気を放っている。隠し撮りされたものではなく、被写体の女性はカメラを向けることに慣れてるらしい、視線を向けている。それを見て黒い男は、ヘルメットの中で人知れず顔をしかめた。

「今、トウキョウにいるケド、今日帰ルと聞きマシタ」

「……その女は、確かにそいつを修理できる腕を持っている。だけど、止めた方がいい」

「アナタ、ジャマしまスカ？」

「……そのつもりだったが、やめた。どうせやうお前は知らないらしいからな」

「……？ どういう口どテスカ？」

「そこまでは教えてやる義理はない」

黒い男が冷たく拒否した時、外が賑やかになる気配が室内に届いた。

「仲間か？」

「ハイ、手伝つてモラいまス」

部屋の扉が開かれて、談笑しながら入ってきたのは、アイマンと同郷と思える者たち11人。その多くはアイマンと変わらない年頃。緩んだ空気が黒い男を見た途端、一瞬で緊張して、荒くれ物のものに変わる。

しかし、アイマンが知らぬ言語で声をかけると、警戒を残しつつも、とりあえず納得はしたらしい。敵対しようとするのは止めた。そしてアイマンは、部屋の隅に置かれていたズタ袋を男たちの前に放りだした。

重そうなその中身を見て、男たちが口笛を吹いて狂喜する。

（盗んだ金を12人で頭割りしても、連中の国なら10年やそこらは平氣で遊べるだろうからな……）

部屋の隅に置かれた、もうひとつ麻袋の中身を推測。

（どこのヤツから仕入れたのか知らないが、あの程度の銃火器なら、高くて2000万もあれば揃うだろうし……）

しかし、と黒い男はヘルメットの中で思つ。

（どうやってそれだけの大金を換金する気だ？ マトモな手段じゃ疑われるだろ……）

裏社会の人間として生きるには、アイマンは知らないことが多い。

「これも忠告する気はない。やはり解雇されるべき人間であつたと、黒い男は改めて納得した。

「アイマン、様子は見させてもらつが、止めはしない。俺たちにまで厄介が及ぶようなら、しゃしゃり出るが、この調子だとそうならないだろ？」

騒いでいた男たちが一斉に目を向けてくる。

しかしそれに構わず黒い男は、部屋の出口へ歩く。

「じゃあな」

「オ世話になつマシタ」

言葉を交わして、黒ずくめの野ばらベルを出した。

中途半端な日常会話。

日常会話を強めた方がいいのか、あるいはバッサリ切り捨てるかした方がいいような気はしないでもないが、試験的にこれで投稿。

都市防衛部の部室には、意外と来客が多い。
それが堤十路の感想。

最初に来たのは、30代と思える男性。

「最近、妻が冷たいんだ……」

「あのー……先生？ それは私に言われても困るんですけど……」

高等部の教員だった。

「『魔法』でなんとかできないか？」

「や、そんなのムリですから、『夫婦で話し合いつのが一番かと……』

「教師の仕事って忙しいんだ……」

「はあ……」

「毎日帰りは遅いし、部活の顧問やつてると土日も休めないし……」

「はあ……」

「それを承知で結婚してくれたと思ったのに……」

「や、そうだとしても、やつぱりガマンの限界があると思つんですね

……」

飲み屋でのグチを連想する空氣に、視線で十路に助けを求めてくる樹里。

こんな悩み（しかも立派な大人の）にアドバイスできるほど、十路も人生経験豊富ではないが、樹里の意見と合わせて『花束でも持

つて早く帰つて一緒に食事しや』ところの結論に至つた。

次に来たのは、高等部の男子学生。

「樹里ちゃん」

「すみません先輩、今田は『』に居座らな『』でくださ『』
「冷たいつ！？」

樹里から『先輩』ならば上級生だが、ビリやう顔見知りらし。

「や、今日は案内中なので、困るんです」

「ビーも、案内受けてる人間です」

「……」

軽く挨拶すると、その男子学生は十路の顔をじっと見る。

「……なんですか？」

「お前とは、なぜか気が合つてそつだ」

「……前世でお会いしましたか？」

「違う。そういう意味じゃない」

「だつたら？」

「今、ロシア美女が熱いと思こますか？」

「いや、特に」

「……やはりお前とは仲良くできそつだ」

「意味わかんね……」

「また会おう！ アーテゴー！」

一見するとモテそうな男子学生、謎のイイ笑顔を残し、遠ざかる。

その背中を指差し、十路は樹里にゆづくつと振り返る。

「……バカ？」

「……

樹里は否定しなかつた。

3番目に来たのは、高等部の女子学生。それほど親しいわけではなさそうだが、どうやら樹里の同級生らしい。

「水野さん、どうしました？」

「ええと……木次さんだけ？」

「あ、部長は今日いないんです。私でよければ」相談に乗りますけど？」

「でしたら、お願ひしたいですけど……」

その女子学生は、気まずげに十路を見てくる。

「……あ。俺、席を外しつくから」

「すみません、堤さん」

どうやら十路がいたら話せないらしいこと気が、部室の外に出て離れて様子を窺う。

水野と呼ばれた女子学生本人は、深刻そうに話しているが、樹里は微笑して、ときおり頷いているから、実際はそこまでないのだろう。恋愛相談やその他の『女の子の悩み』だと、十路は推測した。

「頑張つてください！」

「は……」

内容はわからないが、意外と短時間で終了。びっくり樹里でも大丈夫だつたらし。

ちなみに、客が来ない間はひとりで。

「…………」

樹里は高校生らしく、部室に置かれたまなしのティーンズ雑誌を読み始めた。

「…………」

仕方ないので十路も、本棚に詰めてあるマンガを手に取つて読み始める。

「…………」
「…………」
「…………」
「…………」
「…………」

部室の中に流れる、なんとも言えない時間。ページをめくる音と、遠くから聞こえてくる運動部の掛け声だけが届く。

樹里はあまり気にしない。十路はなんとなく気まずい。

「あ、堤さん、麦茶おかわり淹れましょーか?」

「ああ……頼む……」

冷蔵庫を開け、麦茶を注ぐ音が新たに響く。
そしてソファに座る十路の前に、コップが置かれる。

「どうぞ」

「さんきゅ」

「…………」

「…………」

そしてまた、お互に無言でページをめくる。

「………… なあ、木次さん」

「はい？」

「会話のない家庭に育つたのか？両親の夫婦仲、倦怠期だったのを田の当たりにしたのか？」

「………… はい？」

「いや、なんでもない…………」

理事長室で話を聞いて、予想をしていたつもりだが、それ以上にショボイ内容。

「ここはカウンセリングルームか休憩室？」

「…………否定できませんね。いろんな相談を持ちかけられますし」

「しかしまあ、よく部外者が来るな？」

内容にもよるだろうが、相談事なんて普通、よほど親しい間柄でないとできない。

「木次さんは人望あるんだな」

「いえいえ、人望があるのはこの部の部長で、私はそのオマケです」「ふん?」

たつた2人の防衛部員。樹里を除く残るもう1人。話の合間にたびたび出でてくるが、どんな人物像なのかは、全く出てこない。

「どんな人?」

「……一言で説明するのは難しい人ですね」

「まあ、俺の経験上、『魔法使い』は奇人変人が多いしな」

十路の脳裏に、よくある偏屈そうな老人の魔法使いが思い浮かぶ。部員なら学生だろうから、その想像が変だとは理解しているのだが、テンプレートとして。

「誤解されないように言つておきますけど、いい人ですよ? 取つ付きにくいところありますけど、誰にでも親切で面倒見いい人ですから、こうして相談事が持ちかけられるんです」

「ふん?」

どうも樹里はお人好しな印象があるので、十路は話半分で受け取つておく。

都市防衛部　　『魔法使い』のいる部の代表が、とても普通の人間だとは思えない。樹里ののようなタイプの方が『魔法使い』には珍しい。

「私の口からお話しても、多分上手く伝えられないでの、実際に会つてお話しするのが一番だと思います」

「その部長は?」

「用事があるらしいって、今日は部室に来れないと思いまや」

ならば話せないし、しかも転入を断つたら会つ機会も今度ないだ
るつ。

十路は軽く肩をすくめて、その話を終わらせた時。

「ねーちゃん!」

小学生だろう、元気の良さそうな男の子が、息せき切つて部室に
飛び込んできた。

「来て!」

「どうしたの?」

「イオリがジャングルジムから落ちた!」

言葉足らずな会話だが、それで通じたらしい。

顔つきを改めて立ち上がり、樹里は壁に立てかけた《魔法使いの
杖》^{アビスター}を手にする。

「どーー!?」

「校庭!」

それだけ聞いて、樹里は外に駆け出した。

「あ、おい!」

止める間も、詳しく聞く間もなかつたので、十路も樹里を追い、
高等部校舎の裏を全力疾走。

またも伏線投入。
いつ回収する」と云ふのがやい。

1分後には2人とも、初等部のグラウンドに到着。高等部の校庭とは違い、設置されている遊具、そのジャングルジムの近くに子供たちが数人、固まっている。

「どいて！」

どうすればいいかわからず、心配そうに見下ろす子供たちの輪を割り、その中心、地面に倒れて泣き叫ぶ女の子の側に樹里が膝をつく。

「木次！ 動かすな！」

2秒ほど遅れて十路も近づく。

「折れてる……」

「左腕からジャングルジムを落ちたんだろう。頭を打つてるかもしない」

「回路展開」

樹里が手にした『魔法使いの杖^{アビスツール}』の先端が一瞬だけ発光。

少女の全身を取り囲むように、そして左の二の腕、関節がないのに曲がっている位置に、腕を取り囲むように光る幾何学模様を作られる。

EC-Siricit。現代の魔法を行使する際に現れる『魔法陣』で診察。

「頭は……大丈夫。単純骨折だね。キレイに折れてるから、接合だけで

けで十分

ひとりじりとを呟き、念じるよつに樹里がまぶたを閉じる。

「実行」

たつた一言。

それで骨折部位を囲んでいた幾何学模様が、淡く光量を増し、不自然だつた少女の左腕が元に戻る。

「医療魔法……」

初めて見るものではないが、十路は軽く驚く。

しかし、この手の魔法の使い手で、樹里のよつな若い者はまづいない。

人体の仕組みを理解するほどの知識、つまり医者になると変わらない勉強が必要なのだから。

「うん。完了」

満足そうに頷き、長杖を軽く振ると、幾何学模様が消え失せた。EC-Sircit

「ほーら、もう大丈夫だよー。それともまだ痛い？」

地面上に寝たまま泣いていた少女を抱き起し、樹里が笑いかける。どうやらこいつ光景は、初めてではないらしい。心配そうに見ていた周囲の子供たちは、ほっとしたように顔をほこりばせるだけで、驚いた様子はない。

無造作に人前で《魔法》を使ったといつのに。

それも十路には驚きというか、不思議であつたが、なによりも不

思議に思つていたことと、一つの結論が出た。

「木次さんつて、本当に《魔法使い》だつたんだな」「信じてなかつたんですか！？」

「やへ、大したことなくへ、よかつたです」

ジヤングルジムから落^{アヒスーシル}下し、骨折した少女の治療を終え、樹里は部室に帰つて來た。

「…………」

眉根に皺を作る十路を連れて。

「あのー……堤さん？ もうきからびつしたんですか？」

「…………」

訊ねても十路は返事しない。

またも壁に立てかけた、樹里の《魔法使い》の杖^{アヒスーシル}をジツと見て、微動だしない。

「堤さんーん…………？」

反応しない十路の背後に近付き呼びかけた、その途端。ほんの少しの衝撃と共に、体が軽く落下した。

「え？」

「あー？」

樹里の声の意味は疑問。十路の声の意味は後悔。

「え？ え？ え？」

自分になにが起つたのか、理解できず樹里は狼狽。理由不明で倒れかかった体、上体に回した十路の腕一本で支えられていた。必然的に顔が体に近づき、今まで意識してなかつた十路の匂いが鼻に届く。

（わつ……なんだか安心できる匂い……）

新陳代謝が活発な高校生男子の匂い、しかも夏が近づき汗が流れる梅雨の時期でも、不思議と不快な気持ちにはならない。

「…………スマン」
「や、いえ…………？」

そんなこと樹里が考へてゐるとは当然知らず、気まずげに無理矢理立たせ、怯えたように十路が距離を取る。

「俺の不注意だ……悪いクセが出た」
「癖？」
「前の学校で身についたクセ……」

背後に立つた樹里を、反射的に足払い地面上に倒し、拳か蹴りを叩きこもうとして慌てて制止した。

とりあえずは何もなかつたと、ため息をついて安心し、次もまたあるかもしけないと思つと、十路は暗澹たる気持ちになる。

「誰かれ構わず抱くクセですか……？」

「俺どんな犯罪者だよ！？」

しかし何も知らないというのは、ある意味幸い。的外れな回答に、暗い気分は吹き飛んだ。

「わからなかつたら、それでいい……ともかく悪かつた「はあ……？」まあ、いいですけど……」

奇しくも同時に、2人がそれぞれに同じ評価を下した。

（堤さんつて、変わつた人だなあ……）

（ゝ木次一きすきくつて、変わつた娘だな……）

十路への評価はそのままの意味で、樹里への評価は抜けていると
いう意味で。

「それで、私の『魔法使いの杖』^{アビスツール}がどうかしましたか？」

「あー……いや、いい。なんでもない。言おつかどうじよつか迷つたけど、いま言つことでもないかと思つて」

「？」

迷つっていた雰囲気から、深刻な話をしたいのではないかと想像していたが、そう言われると訊き返せない樹里。

十路が考えていたのは、グラウンドで樹里が医療魔法を使つた件。あんなに簡単に、人前で魔法を使うことを注意しようかとも思つたが、周囲の子供たちが驚いた様子もなかつたので今更なのだろう。そして『抱きつき癖』疑惑で、真面目な話をする気分でもなくなつた。

だから話を変えた。

「あー…… それでも？ 防衛部の活動って一通り見せてもらつたつてことになるのか？」

「まあ、そうですね。どうでした？」

「…… そうだなあ」

活動内容はカウンセリングルーム。《魔法》を使う事があつても小さな治療程度。医療魔法は十路は使えないし、そもそも十路は《魔法》 자체が使えない。

部活動としては存在理由が不明。《魔法使い》などといった世界で一番面倒な人種を使うほどでもない。

こんな部活動の入部が、転入の条件にされる理由は、やはり不明。そこまではプラスマイナスゼロの様相だが、自身への問題で、大きなマイナスだと十路は思う。

無意識の行動とはいえ、樹里を傷つけようとしたのが大きな精神的ダメージ。

「転入は、や

「おー、いたいた。ジュリちゃん」

転入はやめよう、と宣言しようとしたが、部室につづばめが入ってきたことで遮られた。

「まず」「」

「？ なんですか？ これ？」

つばめの手から渡されたのは、合金製のケース。今はオートバイの後部に積みっぱなしにしている、十路の荷物と同じ物に見える。

「ジュリちゃんのケース。今日からコレ使って

「へ？」

「あとトージくん、お願いがあるんだけど」

「は？ 僕もですか？」

「うん。トージくん、体験入部中でしょ？」

「まあ、そうなりますけど……」

「つてことは、『部活』ですか？」

「うん。2人一緒にの方が丁度よさそうだし」

樹里は部員として問題なくとも、十路は現状では部外者。 それで
なにが丁度いいのか疑問だが。

「理事長……俺になにさせる気ですか？」

十路の問いに、つばめは笑みを浮かべる。

邪悪ではないが、イタズラ心を秘めた小悪魔の笑み。

「ある人を迎えて欲しきの」

実はこの文章、元のプロットから実験検証のために変えている部分
があります。
なので無理矢理感があるかもしれません。

00-080 PM17:55 ハヤシト・ドウ=シャロンジュ（前書き）

検証事項の伏線追加。

いつになつたら回収するのか我ながら不明。

坂道を下り、大通りを抜け、2人乗りのオートバイが橋を渡る。新神戸駅から修交館学院までの道のりとは少し違い、今はオートバイの両サイドに、金属製のケースが乗せられている。

神戸市中央区港島。六甲山の土に埋め立て人作り上げた島、ポートアイランド。

過去には医療関係 淡路島の『塔』と『魔法』が現れた以後は『魔法』に関する研究施設や企業が、この場所に集結している。もちろん普通の公共施設や住居、店舗も存在しているが、全体数からすると、やはり企業の建物が多く、ビジネス街の様相を呈している。

「迎えって、まさか俺と同じく転入生候補じゃないだろうな？」

「や、違います。用事で東京まで旅行に行つてた人のお迎えなんですか？」

「オート車で？」 しかも2人乗りなのに？」

「やー……本当にお迎えするだけですね」

「なんか歯切れ悪いな？ あの理事長から話すなどでも言われたのか？」

部室で『お願い』をして来た際、つばめは樹里に、十路には聞こえないように耳打ちしていた。

それを聞いた樹里は、少し戸惑つた様子ではあったものの了承したので、十路も別段気にしていなかった。

「後で堤さんを驚かせたいそうですよ」

「相手、有名人？」

「まあ、一部の人には有名人ですね」

つばめが口止めしているせいで、樹里の返答はハッキリしない。だからこれ以上の詮索は諦めて話を変える。

「『杖』が必要つことは、ヤバいのか？」

オートバイはそのまま直進し南下、海上道路を進む。交通量も多少減り、ほぼ直線になつたので、十路は後ろを少しだけ振り返る。

しかし言葉とは裏腹に『魔法使いの杖』^{アピスツール} 2mにもなる長杖を樹里を持たず、片手を十路のベルトを掴み、もう片方の手でスカートを押さえている。

「そういうわけではないんですけど、ござつて時になにもできませんし、それに身分証明に便利ですか？」

「180億円の身分証明書……やっぱり扱いがぞんざいだな

「今日から大切に扱いますつてば！」

向かう先は人工島を通り抜け、更に先にもう一つの人工島、神戸空港。

話しているうちに、オートバイは空港に到着。有料駐車場に駐車し、2人はヘルメットを脱ぎ、ターミナルビルに入る。

「で、まさか俺の時みたいに、相手に待つりつけ喰らわせてないだろうな？」

「ちよつと危ない時間ですね……」

「おい……」

「文句はつばめ先生に言つてくださいよ……堤さんの時も、時間過ぎてから聞いたんですし」

神戸は世界的にも珍しい地理的条件に恵まれた《魔法》の研究都市。だからこの空港には人の出入りが多い。

「」の中で人ひとり探すのは、かなり骨だと十路は覚悟するが。

「堤さん、いっただけです」

別の方向を見ていた樹里が、十路の服を軽く引っ張つて導く。どうやら簡単に見つけたらしい。

相手のその姿を見て、簡単に見つけた理由を納得する。

機内で電源を切りたがり、早速メモリカードを抜いていたが、ゲート近くの壁際でスマートフォンを操作している、ヨーロッパ系の金髪碧眼の女性。

側に小さなスーツケースを置き、女性らしい曲線を描く体を、カーディガンと白のサマードレスで覆っている姿だけで判断すれば、周囲の旅行客に紛れてしまいそう。しかし理知的な美貌と誰もが彼女に一度は振り返る空気を持っているため、人ゴミの中でも目立つ。

「あら、木次さん？」

樹里が声をかける前に、その白人女性が小さな画面から顔を上げて、近寄つて来る樹里を見つけ、親しげに話しかける。

「わざわざお出迎えに来てくださいましたの？」

その口から出でるのは、外見からは意表をつく流暢な日本語。

「はい、つばめ先生からふるよひに指示されました」

じゃなかつた、殿下をお迎えにあが

?

なぜか『殿下』と呼ばれた女性が軽く首を傾げ、ハーネープロンドの長い髪を揺らし、樹里と共に立つ十路に視線を移す。

「木次さん、そちらの方は？」

「堤十路さん、防衛部の体験入部をされてる方です」

「ああ、なるほど……」

女性がスマートフォンをポケットにしまい、気さくな笑顔と右手を十路に差し出す。

「初めまして。コゼット＝ドウ・シャロンジェと申します」

が、十路は固まつて動かない。

「……ちょっと待て、木次？『付与術士』がどうして……？」

「あら？ 私のその名前をご存じですか？」

「少なくとも日本の『魔法使い』で知らなかつたらモグリです……」

十路が『魔法使い』だと知つて尚、過剰な反応なしに微笑む女性の正体。

立憲君主制国家、つまり王政が残るルクセンブルグ公国第3位の王位継承権を持つ、本物の王女。

そして若干20歳にして、日本における理学と工学の博士号を持つ、その分野の研究の第一人者。

親しみやすい人柄とは裏腹に、技術研究者としても、外交の相手としても、国家的な重要人物。

「堤さんがコゼット殿下をご存じなら、研究成果もご存じですね？」

「ああ……空間圧縮技術の確立」

それは魔法を応用させ、密閉した空間を人為的に操作し、實際以上に容積を増やす次世代技術。

つまりゲームでは当たり前に存在する、いくらでもアイテムが入る魔法の入れ物を、初期段階ながら現実に作つてしまつた。だから彼女は魔法の物品を作る特殊な生産能力保有者 『付与 ヤンタ ハンチ 『付与』 ヤンタ ハンチ と呼ばれる。

「私が行つたのは基礎技術の作成だけ。しかもまだまだ実用段階には程遠いです」

運輸業界に革命を起こす驚異的な技術だが、彼女の言葉通り、現状ではまだ問題が多いため、その技術は市民生活までは広まつてはいない。

そのため彼女は、科学技術分野ではかなりの有名人ではあるが、一般人は知らないであろう。もし知られていたとしても、それは『美人の王女様』という肩書きの方。

「それから、どうやら貴方は、木次さんと私の関係に驚いているようですね？」

「ええ、まあ……」

「修文館学院のご協力があつてできた研究ですし、現在も都市防衛部で継続実験を行つてもらつていますので、理事長や木次さんとも顔なじみなんです」

「……」

カウンセリングルームどころではなく、人類史上に残る発明に貢献していた都市防衛部の実態に、十路は絶句する。

「……謎が多い方と聞いてましたので、まさか日本でお皿にかかりるとは、思っていませんでした」

十路は差し出されたままの「ゼット」の右手を握る。『相手は王女様だから、手の甲に口づけしきつて意味じゃないよな?』と若干の不安を持つて。

「國の者からすると、王族らしからぬ行動をする私は恥なのですよ。だから日本にいるのも公にはされていないのです」

ただの握手で正解だつたらしい、自然な笑顔を崩さないまま、『ゼットが返す。

「防衛部のように、私の思惑で動いて頂ける『魔法使い』の方々がおられると、非常に都合がよろしいので、現在は神戸を拠点に個人で活動しています」

「研究機関や企業とは契約してないんですか?」

「……契約してると言えばしてますけど、基本的にはフリーです。実家の都合もありますので……」

少し言いつらやつたコゼットの言葉に十路も納得。歴史ある家はとにかく制約やしがらみが多い。

王家を『実家』と呼ぶのは妙な気がしないでもないが。

転生モノではないですが、『エンプレート』『王女様』追加。
ちなみに現実では『ルクセンブルグ大公国』で、微妙にフィクション入っています。

やつと話が本格化、一番最初につながります。
以前仕掛けた伏線に、勘のいい方は気が付ける話かと。

「それで、木次さん。^{きすき} 彼は？」

車1台分の車間距離を取るオートバイを、コゼットは視界に收めながら、タクシーに同乗している樹里に訊く。

「お話を通り、^{ウチ} 防衛部の体験入部をされてる方です」

王女の割にタクシーを使おうとする「コゼットに驚く十路に、『自称：庶民派』と説明し乗り込んだ。

その際、話があると樹里に同乗を促して、2人はタクシーに乗り、十路だけでオートバイを運転して、追従している。

コゼットがやはり気にするは、顔見知りの樹里について来ていた、初対面の男子（元）学生。

「あのバイクは、彼の持ち物ですか？」

「や、今日^{ウチ} 防衛部に来た新しい備品です」

「では、バイクに載せてあるケースは？」

「片方は私なので、今日になつてボックスが変わつたんです。もうひとつは堤さんの荷物です」

樹里の言葉に、唇に拳を当てて考へ込むコゼット。

「あのケースの中身が私の想像通りだとすると、理事長らしからぬ入れ込みようですわね……そこまでして防衛部に欲しい人材ですか」「詮索は部則で禁じられてますから、詳しいことは私は知りません」「技術者として気になつただけで、私も深く訊くつもりはありません」

「んよ」

「あと、いいんですか？ 堤さんにあんなウソついて」

「あら？ ウソはついていませんよ？ 確かに私の立場を、少しごまかしましたけど」

「それに、いつまで王女サマ続ける気ですか？」

「いつまでもなにも、私は死んでも王女ですけど？」

樹里の呆れ顔に、『ゼットは異性どもが同性も魅了する笑顔を返す。

「つばめ先生から口止めされたから、なにかと思つたら……」「理事長は人をからかうのが好きな方ですし、私はいつも通りにしているだけで」

不意にタクシーの窓ガラスがノックされた。

内輪の話をしていた2人が振り返ると、オートバイの十路が並走している。

パワーウィンドウが開けられると、十路は器用に樹里のヘルメットを差し出し、耳部分を軽く叩く。

「はい、堤さん、どうしました？」

『話がある』といつもドライバーに、ヘルメットの無線を使って呼びかける。

「追跡していく車がある」

タクシーはほぼ一本道の人工島から本土、神戸市街地に入っている。

後ろには何台も車が走っているが、当然交差点があるものの、同じ

じ方向への交通量も多く、樹里の町には特別不自然な点はない。

「2台後ろにブルーナンバーのベンツ。王様に関係者かどうか訊いてくれ」

「ぶるーなんばー？」

「外交官車両のことです。きっと私の関係者ですよ」

十路の無線を聞いていなくとも、樹里の雰囲気で内容を察したのだろう、ゴゼットが答える。

外交特使や領事館員が使う、有事の際には日本の法律は適用されない車。特に青いナンバープレートが使われているため、こう呼ばれる。

王女がタクシーに乗っている方が不自然なので、そういう車があるのはむしろ自然と、樹里から返ってきた返事に十路は納得。

「その後ろに1台はさんでミニバンと、ずっと離れて単車オートが付いて来てるようだけど、そっちもなのかな？」

「え？」

丁度カーブに差しかかったので、後続車の様子がよく見える。

黒塗りのベンツ、そしてその後ろに国産の白いミニバンが続いて走っている。

十路が言つオートバイは、車列に隠れて確認できなかつた。

「お国の関係者の方、黒のベンツ以外にもいます？」

「？ 変ですね？」

樹里の問いかけてゴゼットも振り返り、首をかしげ。

そして樹里のヘルメットを借り、十路と直接無線で話す。

「堤さん、その車が私たちになにかすると考えてますか？」
「ただの偶然という可能性も十分ありますが、『気をつけたおへ』ことに越したことはありません」

「」へ普通に応える十路に、コゼットは内心舌を巻く。

（一般人が考える危機管理ではありませんよ……）

それを知ったから、どうということはないのだが。

「……現状では放置ですね。不審だという確証もありませんし「了解」

短い返事だけを残し、会話は終わり。

コゼットとしては好ましくない好奇心。どうしても考へてしまつ疑問が浮かぶ。

（『ブルーナンバー』なんて言葉まで）存じとは……どうやら堤さんは、相当マトモな経歴ではない方のようですね？）

タクシーが停まったのは、マンションに似た建物。
そのすぐ後ろにオートバイを駐車させ、十路はヘルメットのシールドを跳ね上げ、その建物を見上げる。

「ルクセンブルグ公国のお外事務所……か」

「神戸は『魔法』の最先端研究都市。外交的な思惑が絡みますから、他の国でも政府直属の在外公館が多く置かれています」

ちゃんと料金を払い、タクシーを降りたコゼットが説明を付け加える。

「どうも日本の方は、『在外公館』と言ひ言葉に馴染みないようですが、堤さんは？」

「大使館や総領事館といった他国内に設置した政府出先機関の総称ちなみに普通の日本人は、そういうそんな場所に用事ないので、馴染みないでしょう」

「よくご存じですね」

「……俺、試されます？」

「いいえ。そんなつもりはありませんが、ご不快に思われたら申しわけありません」

「ごく自然な気さくな笑顔を向け、コゼットは十路との話を終わらせた。

「ここでタクシーを降りて、木次さんはどうされるんですの？」

「バイクの後ろに乗せてもらいますけど？」

「そのスカートでバイクに乗りますの……？」

「あはは……2人乗りに慣れてますから、大丈夫ですよ」

内輪の会話をし始めた2人を後に、十路は軽く周囲を見渡す。客と荷物を降ろしたタクシーは発進し、暮れ始めた街中に新たな客を求めて走り去った。

少し離れたところに、黒いベンツが停まり、乗っていた護衛らしきスーツ姿の人物は、1人だけ降りて王女の様子を離れて伺つている。

その車の後に続いていたミニバンとオートバイは、ここに来るまでの交差点で別れた。

大きな通りからは外れるので、多くはないが、車や人通りは少ない。

くない場所。

(警戒する」となかつたか?)

「ぐく普通とは言えないが、特に気になることがある光景ではない。相手が王女でも、ここが高級ホテルの前だったら、ままある場面だろう。

(あの人食えない理事長のことだから、俺に王女様の護衛をさせる気だつたのかと思つたけど……考えすぎか)

十路は軽く頭を振り、考えを捨てる。

そして自分を省みて、人の言葉を素直に受け止められなくなつたことに愕然とする。

「前の学校のせいで、腹黒くなつたもんだなあ……」

「はい?」

「ゼットとの話を終わらせて、近づいてきた樹里に、ただのひとりごとだと軽く手を振つて否定。

それで小首を傾げながらも、樹里は追及しないことにしたらしく、自分のヘルメットを着けて、リアシートに跨る。

「それでは失礼します」

「えーと……殿下、またです」

「ええ。それでは、気をつけて」

見送るつむりらしい「ゼット」に一礼し、オートバイは発進。修交館学院に向けて、ゆるやかなスピードで出発した。

「王女つて割には、気さくな人だな」

「……間違いではないんですけど……」

「どういう意味？」

「あ、や、なんでもないです。それより堤さん、これからどうするんです？」

「転入のことかあ……」

「あ、それもですけど、泊まる場所」

樹里と和やかな会話をしつつ、安全運転で帰るつもりとしていて。車の衝突音、そして破裂音が後ろから、かすかに聞こえた。

「ひやあ！？」

反射的と言つていゝ速度でアクセルターン。ハンドルを切り、車体を傾け、後輪をすべらせ180度旋回。振り落とされそうになつた樹里は、慌てて十路の腰にしがみつく。

「堤さん！？ なんですか！？」

「王女様が襲われるかもしない」

「え！？」

なにか確証あつての行動ではない。ただの交通事故だと考える方が自然。

しかし十路が一番信用している己の感覚に従つ。

それは、直感。

それが十路の中のスイッチを切り換えた。

「間違いだったらそれでいい

「お願いしますー」

アクセル全開。速度制限なんて無視、1秒未満で100km/hオーバーという、普通のオートバイでは不可能な急加速で来た道を戻る。

あつと言ひ間に先ほど停車した場所、ルクセンブルグ公国の在来事務所前が視界に入る。

そこには、タクシーを追いかけていた黒い外交官車両と、どこかに消えていたミニバンが衝突している。

車の中の王女の護衛らしき人物は、エアバッグに挟まれてて。外に出ていた護衛1人は、動きが止められてる。先ほどの破裂音は、警告射撃によるものだろう、銃を構えた覆面姿の男が警戒している。もちろんモデルガンなんて甘い考えは即座に捨てる。

そして。

「なんですか貴方たち　　！？」

やはり顔を隠した男たちが、白いバンの中と外から強引に乗せようとしているゴゼット。

「歯あ食いしばって腹に力入れろよ！」

「え！？　ちょっと堤さん　　！？」

相手に向けて一言警告してから急ブレーキ。一応の手加減はあるものの、それ以外は遠慮も躊躇もない。

「轢いた――！？」

衝突と共に誘拐犯の1人はゴゼットから引き剥がされ、オートバイの停止と共に慣性で前に吹っ飛んだ。

突然現れたオートバイにより、成人男性が軽々と飛ぶ、銃が出てくる以上にある意味あんまりな状況に場の空気が凍る。

「よし」

「人身事故を起こして平然としてる堤さんが怖いです……」

「前の学校で何回もやつたから慣れた」

「どんな学校ですか！？」

「そんなことより」

車外に出ていて固まっている、もう一人の男に指を向ける。

「あつち、木次の担当でいいのか？」

「え！？ あ、はい！」

言葉の意味を理解した樹里が、車体後部右側、自分の右足の下のケースを叩く。

「『E - W - S』解凍！」

声紋認証と指紋認証完了。即座にロック解除、軽快な動作音を上げて開き、短い機械の腕が中身を渡す。

それは技術者としてのコゼットが作り上げた魔法研究の成果、空間圧縮技術を使い、外見以上の容積を持つ収納ケース。通称『アイテムボックス』。

40cmほどのケースに絶対に収まるはずのない、2mもある『アヒスツール魔法使いの杖』^{Ahisstool}　　登録名称『E - W - S』が飛び出した。

樹里はそれを小脇に抱え、威嚇射撃を行つた犯人に向けて集中。『マナ』を操作し、男の真上に発光する幾何学模様が展開させる。

「実行！」

術式『雷撃』　名前そのままに、小規模な落雷が発生し、男を直

撃した。

幸い犯人1人の感電だけで済んだが、伝導体の多い街中。被害がどう周囲に広がるかわからない状況で、電気を空中に流す樹里に、十路は軽く引いた。

「……そのエゲつなさで、俺が人をはねたの、文句言われたくない」「ちゃんと手加減しましたよ！？」

「銃が暴発したらどうする気だつたんだ？」

「えーと……結果オーライということ……」

予想外の不穏な状況に、しばし時間が止まっていたが。

「離しなさい……！」

誘拐犯は仲間2人を見捨てて、王女を強引に車に乗せ、バックで慌てて遠ざかる。

樹里もさすがにコゼットが乗った車に向けて《魔法》を使うことができない。

十路はそもそも《魔法》を使えないから、それを止める手段がない。

「それで、どうすればいい？」

「追つてください！」

「了解」

自動車追突事故、銃の発砲、そして誘拐事件、そこにオートバイが乱入、小さなケースから長大な杖が出現し、小規模な落雷が発生。いくら《魔法》の研究都市とはいっても、平和な街中ではありえない光景を、少なくない人間が見て固まっていたが、そんなことは構わない。

誘拐犯2人は放置、人目の場所なら誰かが対応してくれると判断。

「やつちまつた……」

直感が当たつてしまつたことと、自分が望む『普通の生活』を壊すことを後悔しながらも、王女をさらつた車を追跡した。

妙なところで切っているので、今日は短いです。
今までも文章量はマチマチですが……

日が暮れはじめた国道2号線を西に進む道中。

意図的に追突事故を起こした車は、駆動音に異音を混じらせているが、日本の技術の優秀さを示し、動きには支障がない走りを見せている。

十路は無理をせず、100m以上の車間距離を取つて、その車を追跡する。

ちなみに樹里は、そのオートバイの後部座席で、長杖を脇にかかえてやりにくそうに、携帯電話をいじつていた。

「木次、どこまで介入する気だ？」

今まで多少丁寧に『さん』付けで樹里を呼んでいたが、もうそんな余裕はない。

「本当なら俺たちが、こういう事に首を突っ込むのはよくない」

「私たちが一般人だからですか？」

「それもだけど……」

警察に限らずだが、組織は外の人間の介入を嫌うことが多い。自分たちのやり方とは違う人間に、状況を荒らされたくないからだ。更に一般市民が凶悪と予想される事件に関わると、余計な被害を増やすことにもなるからだ。

しかし十路が言いたい意味は、少し違う。

『魔法使い』はその能力ゆえに、刑事案件を含む普通の人間の生活に触れることは、原則禁じられているからだ。

「それに事件に巻き込まれるのは外国の要人。外交上の問題もあるはずだから、俺たちが介入するのは余計好ましくないはずだ」

「大丈夫です。今、つばめ先生にメールしましたから」

「いや、理事長に連絡したところで、なにも関係ないだろ?」

「学校では防衛部はなんでも屋と説明しましたけど、固い言葉で説明すると、少し意味が変わるんです」

固い言葉、つまり公式な発表。

「有事の際には警察・消防・自衛隊に協力し、事態を解決する民間の高度緊急対応実験部隊」

「部隊? どこまでやる気だ?」

「場合によつては戦闘行為まで。許可されているといつよつ、そんな『依頼』が来たら義務です」

「マジか……?」

その言葉で、この部活動の存在に、ある程度の納得もできる。

『魔法使い』は国家に管理される人材。しかし樹里は普通の生活を送つている。

それが許されている理由が、これなのだろう。

政府機関に組み込まれていない理由、修文館学院自体や理事長であるつばめの正体に、若干の疑問は残るが、なんらかの超法規的措置や裏取引があるとすると納得できなくもない。

そしてふと、つばめが『ゼットの出迎え』『お願い』した時のことを思い出す。

こんな事件になる可能性があつたからこそ、樹里と一緒に十路を行かせたのではないだろうかと。

「とは言つても、『いう事態は私も初めてですけど……』

「……色々言いたいことはあるけど、どうするんだ? 俺たちで王

女様を取り戻す氣か？

「それができればベストですけど……」

「現状、木次の『魔法』でどうにかできる方法は？」

「や、普通の『雷撃』だと車に効果ないですし、有効な手段となると、周囲の被害と人命を保障できません……」

「おい……中間どころの丁度いいのは？」

超強力な射出式スタンガンの他は、ミサイルしか持っていないような状況に、十路は複雑な気分になる。オートバイの後ろに乗つて、自分のベルトを片手で掴んでる少女が、普通の女子高生ではないと、いう再認識と共に。

「ああもう……！　『魔法』が使えても、こいついう時には全然役に立たないなあ……！」

「『魔法使い』おれたちく』はそんなもんだ」

それでも一応、対応策の為に確認を取る。

「木次。王女様の安全は第一として、犯人の確保と解決の迅速さ、どっちを優先するべきだ？」

「スピード優先で。『魔法』の使用を許可されてるのは、淡路島の『塔』を中心とした半径130km圏、この街を出られると、私にはなにもできなくなるんです」

「となると……大阪まで行かれると面倒になるな」

救出には大問題が一つ。既に樹里が『雷撃』で行動不能にしていた誘拐犯は、銃を持っていた事。他の犯人が持っていないのを期待するのは間違いだ。

現状としては十路たちが不利ではあるが、有利な点もある。

誘拐犯の反応から察するに、十路たちは正体不明のイレギュラー

な存在であり、《魔法》についても詳しくない。

「最終確認だ。俺、基本的にアラブルに巻き込まれのせいか免んだ

「……」

先ほど誘拐を阻止しようとした空氣は既にやがて、十路の空氣は

いつも通りの怠惰な野良犬。

「や、誰でも誘拐事件に巻き込まれたくないと思いますけど……」

「王女様がどうこう理由で誘拐されたかはわからない。だけど早々に傷つけられることはないだろ？ し、むしろ強引に俺たちがしゃしゃり出ると、巻き添えくらつ可能性がある」

「う……確かに」

「それでも俺と木次でなんとかするべきだと思つのか？」

「……」

必要があるのか微妙ですが、またも別視点の文章。
短いので連続投稿。

最初は慌てたものの、無理矢理連れ込まれた車が走り出すと、コゼット・ドゥ・シャロン・ジエは抵抗を止めた。

十路と樹里が1人ずつ、誘拐犯を行動不能にさせたが、車の中には運転手を含めてまだ2人乗っている。ならばここでジタバタする方が危険だと判断した。

（私が誘拐された理由はどちらかしら……？ 王女だから？ 特殊な技術者だから？ それとも ）

誘拐犯たち3人が怒鳴りあう声で、思考は一時中断。早口で慌てた様子なのはわかるが、なにを言っているのか理解できない。

コゼットは5ヶ国語習得。（アドリエンガル） ルクセンブルグ公国の公用語は、フランス語・ドイツ語・ルクセンブルグ語。それに加えて英語と日本語も日常生活に困らないレベルで習得している。

そんな彼女でも理解できない、別の国の言葉を、犯人たちは怒鳴り合っている。

ギャンブルで一攫千金を目論むような、短絡的な行動を行う者は、自分が失敗することを考慮に入れていない事が多い。

どうやら怒鳴っている男はそういうタイプで、スマーズにコゼットを誘拐できず、仲間を2人失った狼狽を、怒りとして吐き出しているのだろう。

そしてハンドルを握っている、やはり覆面をした犯人は、それを諫めている様子。

（犯人たちの身長は高くて190cmはない。体は全員筋肉質。武装はピストル……サブマシンガンも持つてる？ 動きは統率が今ひとつ取れていない。スペイン語やポルトガル語の語感とも違う。

言葉の雰囲気からすると西・南・東南アジア圏の人間?)

彼女は少ない情報を元に、冷静に分析。

(軍人崩れか、犯罪組織の私兵でしうつか? さすがに私が暴れでどうにかできるとは思えないですね)

そして現状最良と思える行動を「ゼットは取る。すなわち、大人しくする。

突然の自体にも平静さを取り戻し、取り乱さない辺りが、王女の貴祿と呼べるものがある。

(それにしても)

大人しくしている以外にないのだから、やることを言えば考えること。車に押し込まれる直前のことを思い出す。

(相手が誘拐犯とはいえ、あの2人、街中でムチャしますね……)

顔見知りの女子高生と、今日初対面の青年。

車の中の犯人3人が騒いでいるのも、あの2人が原因だろう。突然現れた2人乗りのオートバイにより、1人は不可思議な技で感電し、もう1人は躊躇なくはね飛ばされ、見捨てる事になつた。誘拐事件をスムーズにやろうなんて甘い考えだが、さすがにあれは想定外だろう、犯人たちの狼狽も理解できなくはない。

(しかし、神戸で自由に《魔法》が使える《魔法使い》を「ご存じない」となると、どうやら防衛部自体をご存じない?)

ならば

「 ッ！」

「ゼットを強引に車内に連れ込んだ犯人の、小さく舌打ちで思考が止まる。

覆面で顔を隠し、そして彼女は知る由はないが、それは『アイマン』と呼ばれた少年。

彼は座席の下に入っていた金属の塊を、布に包まれたまま手にした。

（あれは ！？）

それを見て、コゼットは人知れず顔色を変えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0589ba/>

SSSS

2012年1月8日18時52分発行